

様態・推定表現としての「様子だ」

—ヨウダの史的変遷との関わり—

川 島 拓 馬

1. はじめに

日本語における認識的モダリティ形式の一つであるヨウダには多くの研究が存在する。ヨウダの用法の中で「様態」と言われるものについて、その意味は「様子だ」として説明されることがあり、例えば工藤（2014）は「「ようだ／ようだった」が〈知覚印象〉を表す場合、「様子だ」と意味的に近い(p.305)」と述べている⁽¹⁾。「様子だ」は新屋（1989）で「文末名詞文」、角田（1996）で「体言縮め文」と呼ばれる構文を構成する一形式である。工藤（2014）は、ヨウダには否定形式がないが「様子だ」には「様子はなかった」のような否定形式が存在することから、相対的に見て「様子だ」は形式名詞性を備えており、ヨウダは助動詞化が進んでいると述べている。

ヨウダは歴史的に見て形式名詞「よう（様）」にコピュラが後接したものであり、構成的に見れば両者は同じである。だが名詞としての性質という点から見れば、現代語のヨウダと「様子だ」の間には大きな差がある。本稿では、近現代語の「様子だ」についてヨウダと対照させることでその特徴を明らかにする。その際、ヨウダの史的変遷の観点も導入し、両者の関係性や異同を分析する。更に「様子だ」のあり様について、言語形式の歴史的変化の方向性と関連づけて述べたい。

2. ヨウダの用法に関する先行研究

本節では、モダリティ形式のヨウダが持つ用法について概観する。先行する研究は多いが、ここでは歴史的な観点を踏まえて用法を整理した岡部（2011a）を取り上げる。

2.1 現代語におけるヨウダの用法

現代語のヨウダの用法は大まかに〈推定〉、〈様態〉、〈比喩〉の3つに分けられており、以下のように整理できる。

〈内実推定〉

(1) (外からザーという音がするのを聞いて) 外では雨が降っているようだ。

〈原因推定〉

(2) (免許を持っていないはずの友人が車を運転しているのを見て) 春休みの間に教習所へ通ったようだ。

〈様態〉

(3) (混み合っている店内を見て) いつもより混んでいるようだ。

〈比喩〉

(4) (宝くじの1等に当たって) まるで、夢でも見ているようだ。

ここで重要となるのは、「推定」用法に「内実推定」と「原因推定」の区別を設けることである。「推定」とは「現在話し手が認識している状況の背後の事情を推定する(p.36)」ものであるが、この両者は推定のあり方が異なっている。(1)では話し手が現在把握している状況(=外からザーという音がする)に基づいて今現在起こっている出来事(=外で雨が降っている)を推定しているが、(2)では話し手が現在把握している状況(=免許を持っていないはずの友人が車を運転している)をもたらしただけの出来事(=春休みの間に教習所へ通った)を推定するものである。この両者は言い換えれば、現在の状況の「内実」を推定するのか、「原因」を推定するのかの違いであり、時間的に考えれば、現在の状況と推定内容とが同時であるか、推定内容が先行するかの違いであると言える。

2.2 江戸語におけるヨウダの用法

江戸語のヨウダの用法は、現代語と対応させて示すと以下のようになる。

〈内実推定〉

(5) 松次郎は眼を覚し、松次郎「何だか【時刻が】おそい様だの」 (花筐)

(6) (北八の態度を見て) 弥次「へ、どふやはづかしいやうだ、ハ、ハ、ハ」
(東海道中膝栗毛)

〈様態〉

(7) (馬に乗っている北八に向かって) 弥次「おらアそろ／＼さきへいくぞ。ソレ北八、
右のほうへかしぐよふだ」 (膝栗毛)

(8) (船に乗っている場面) 客「さし汐がだいぶはやいやうだ」 (廓中奇譚)

〈比喩〉

(9) 妙心「お鶴、これを見な。誠に好人形ぢやアないか。とんと生きて居る様だのう」
(花筐)

(10) (嫁の悪口)「ようかし雑巾の帳返しも手にのらねへ。針を一本持せると、畳屋さんが端をさすやうだ」 (浮世風呂)

〈話し手の内的感覚〉

(11) 川ごし「ナニおまい、サアそつちよヲつんむきなさろ」ト二人をかたぐるまにのせて川へざぶ／＼とはいる。北八「ア、なんまいだ／＼。目がまはるよふだ」
(膝栗毛)

(12) 七吉「真実に貴君の力は、^{ひどい}強大ぢやアありませんか。右の手が痺れて、覚えがな

まず推定に関して述べると、(5)(6)のように内実推定の用法は見られるものの、原因推定の用法は確認できない。この点は、江戸語のヨウダの大きな特徴の一つである。様態と比喻に関しては、現代語と同様に用例が確認できる。また、江戸語特有の用法として「話し手の内的感覚」を表す例が存在することが指摘される⁽²⁾。この用法は、「目が回る」「手が痺れて感覚がない」といった話し手の身体内部の感覚を述べるためにヨウダが使われている。このような場合、現代語であればヨウダを用いないのが普通である。

2.3 まとめ

現代語と江戸語におけるヨウダの用法は、以下のようにまとめられる。

【表1】現代語と江戸語におけるヨウダの用法分布

	A1 内実推定	A2 原因推定	B 様態	C 比喻	D 内的感覚
ヨウダ(現代語)	○	○	○	○	×
ヨウダ(江戸語)	○	×	○	○	○

上記のような分布に対する解釈として、岡部（2011a）では2つの点が指摘される。一つは、江戸語において分布が見られる内実推定、様態、内的感覚には、話し手が認識した現在の状況を描写する（現状描写性）という点で共通点があるということである。もう一つは、内実推定と原因推定は現在そのようにある状況の背後の事情を「～である」と解釈する（現状解釈性）という点では共通するものの、内実推定は現在の状況を別の側面から描写しているとも捉えられるが原因推定はそのように捉えられないということである。

先に挙げた現代語の例に則して言えば、(1)では「外で雨が降っている」という事態は、話し手が捉えた「ザーという音がする」という事態の別の側面と解釈することができる。従って、内実推定用法は現状描写性と現状解釈性の2つの性質を有していると言える。一方(2)では「免許を持っていないはずの友人が車を運転している」という事態と「春休みの間に教習所へ通った」という事態は時間軸上の異なる2点にあるものであり、同一の事態を別の側面から捉えたとは解釈できない。つまり、原因推定用法は現状解釈性を有してはいるものの、現状描写性を持つとは言えないのである。以上のことから岡部（2011a）では、江戸語のヨウダは現代語に比べて現状描写性の側面が強く、現代語のヨウダは江戸語に比べて現状解釈性の側面が強いと述べられている。

3.「様子だ」の用法

本節では、ヨウダに意味的に近いとされる「様子だ」について用例を収集し、分析を

行う。用例の分析に際しては、前節で述べた岡部（2011a）の用法区分を受け継ぐこととする。

用例収集に際しては、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を使用した⁽³⁾。その中から「この写真に写っているのは満開の桜が咲いている様子です」のように分裂文や指定文などヨウダとの比較にそぐわない例を除外した結果、今回対象とする「様子だ」の用例は1169例となった。これらの例を先に見た用法別に分類すると、以下のような結果になった。

【表 2】用法別「様子だ」の用例数と割合

	内実推定	原因推定	様態	計
用例数	622	28	519	1169
割合(%)	53.2	2.4	44.4	100.0

結果から、大きく内実推定と様態の用法に二分されることが分かる。まず内実推定の例から見ていく。

- (13) 玄関の沓脱ぎには男物の靴がきちんと揃えられ、竹村少将は既に来ている様子であつた。 (山崎豊子『不毛地帯』)
- (14) やがて左右に広がった少女の両手が不自然に揺れ出した。どうやら目でも回した様子だ。 (朝倉卓弥『雪の夜話』)

(13) では「玄関に男物の靴がきちんと揃えられている」ことから「竹村少将が既に来ている」ことを推定しており、(14)では「少女の両手が不自然に揺れ出した」ことから「目でも回した」という出来事導き出している。いずれも話し手が把握した状況から現在の事態を推定しており、内実推定の用法と考えられる。(14)のように、不確定性を表す副詞「どうやら」「どうも」と共起する例もまま見られ、「様子だ」に内実推定を表す用法が存在すると言えることができる⁽⁴⁾。

次に、様態の例を以下に挙げる。

- (15) 「話がしたい、と言ったろう？信じないのか」「そうじゃありません」と、亜紀子は急いで言った。いかにも、殴られるのが怖い、という様子である。 (赤川次郎『雨の夜、夜行列車に』)
- (16) 清作は、コック場へかえった。マスターから何かいわれるだろう、と思った。彼は、それを待ちながら、コック場を洗った。心も手もおぼるおぼるふるえていた。だが、マスターはだまっていたのである。明らかに、叱ることが出来ないほど清作へ愛想をつかしている様子だった。 (椎名麟三『作家の自伝』)

(15)では「いかにも」とあることから、「殴られるのが怖い」という亜希子についての現状の描写であると見なせる。(16)では「明らかに」という語句から、「清作へ愛想をつかしている」という事態をそのまま話し手が捉えていると解釈できる。いずれも話し手が認識した状況をそのまま描写するような例であり、様態の用法と言える。ここで推論行為は存在しないと考える。

ただし、「様態」と「内実推定」は連続的であり、実際の用例を見ていくと、どちらに判断すべきか迷う例が散見される⁽⁵⁾。具体的には、以下のようなものがある。

(17) 男は伏せていた瞳を上げ、女の横顔を覗き見る。視点を宙に結び、物思いに耽っている様子だ。
(原田宗典『優しくって少しばか』)

(18) 六人掛けの飯台で、薄汚れた服装の男が独酌でやっており、目前に銚子が数本並んでいた。すでに相当、酔いがまわっているようすであった。

(澤田ふじ子『女狐の罟』)

(17)では男の動作などから「物思いに耽っている」と推論したとも考えられるが、「視点を宙に結び」とあることから「そういった様子」を話し手が直接捉えただけでも解釈できる。(18)も「目前に銚子が数本並んでいる」ことから「相当酔いがまわっている」ことを導いたとも、男が酔っている様子をそのまま認識しただけとも捉えられるだろう。このように、主に人物の内面的な事柄について述べる場合、判断に迷う例は多く見られた。「様子だ」をヨウダに置き換えると推定の読みが優勢になるようにも思われ、「様子」という名詞から視覚的に捉えられるような事態を想起しやすいと考えられる。

これ他に、原因推定の例と考えられるものも幾らか見られた。以下、例を挙げる。

(19) ゆうべの敵の艦砲射撃は狙い澄ましたように、内陸側にある戦闘機用飛行場を狙った。空中偵察により正確に位置をつかんでいた様子である。

(田中光二『連合艦隊大激闘』)

(20) まもなくずんぐりした小さい騎士が、鎧兜をガチャつかせ、仔馬を追いかけながら絵の中に現われた。鎧の膝のところに草がついているところからして、いましがた落馬した様子だ。(松岡佑子(訳)『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』)

(21) 滝を通り過ぎて山道を下って行くと、両側に私有地とか立入禁止の立て札が増えていて、どうやらこの二十三年の間に山が小さな区画で売りに出された様子でした。
(Yahoo!ブログ)

これらは現在の事態を根拠に、過去の事態について推論を行っている例だと考えられる。(19)では「敵の艦砲射撃が内陸側にある戦闘機飛行場を狙った」ことから「空中偵察により正確に位置をつかんでいた」ことを推定しており、「位置を正確につかんでいた」のは発話時より過去の出来事である。以下、(20)の「落馬した」、(21)の「山が

売りに出された」も、それぞれ「膝に草がついている」「私有地や立入禁止の立て札が増えている」という現在の事態の原因となる過去の事態であり、いずれも原因推定の用例だと言える。

しかしながら、今回調査した「様子だ」の用例1169例のうち原因推定と解釈できる例は28例に留まっている。これは全用例の2.4%であり、確認できた例は極めて少なかった。BCCWJでサンプリング調査を行ったところ、ヨウダの用例に占める原因推定用法の割合はおよそ12%程度であり、ヨウダと比較しても「様子だ」の原因推定の用例は僅少である。従って、「様子だ」に原因推定の例はほぼ見られないと言ってよいと思われる。比喻や内的感覚を表す例も「様子だ」には見られず、「様子だ」の用法をヨウダと対照させる形で示すと、以下の表のようにまとめられる。

【表3】ヨウダと「様子だ」の用法分布

	内実推定	原因推定	様態	比喻	内的感覚
ヨウダ(現代語)	○	○	○	○	×
ヨウダ(江戸語)	○	×	○	○	○
「様子だ」	○	△	○	×	×

4. 「様子だ」とヨウダの名詞性

歴史的に見たヨウダの構造変化について、青木（2011）は以下のように示している。

(22) 春ニナレバイヅクモ花イヅクモ柳ナレバ [[錦ノミダレタ] ヤウ] 也。

(中華若木詩抄・巻上・35ウ)

(23) 今夜は^{だい}大^{ながい}お土手が [[永] やうだ]。

(遊子方言・発端)

中古・中世の例は「連体節+やう」という名詞句にコピュラの「なり」が後接したものと解釈されるが、近世以降になるとこれが「様子だ」という判断を表す形式として機能語化したと指摘される。古代語において既にヤウナリという形式自体は存在していたが⁽⁶⁾、山口（2001）によれば、古代語における「やう（様）」は単独で主語などに用いられる実質名詞でもあり、「言ふやう（は）」のような形式名詞的な用法もあった。これが近代語になると、実質名詞や形式名詞の用法が衰退し「ようだ」という一語の助動詞になっていったと述べられている。つまり、通時的変遷を経て現在のヨウダが成立する過程で、「よう」の名詞性が薄れてきたとすることができる。

ヤウナリ（ヨウダ）の名詞性については、山村（2013）が統語構造の観点から考察している。そこで挙げられている観点は「文の成分としての役割」「モダリティ句に連体修飾されるか」「モダリティ句を後ろに重ねられるか」「疑問の助詞と共に起するか」の4つである。以下、例を挙げる。

- (24) 「いかなるものゝ集へるならん」と、やうかはりて思さる。 (源氏物語・夕顔)
- (25) 「百首よむやうはならひたるか」と仰せごとありければ (古今著聞集・5)
- (26) この僧、人の夢にみえけるやうをかたる時、この男いふやう (宇治拾遺物語・89)
- (27) 繪よくかきたらむ屏風をたてならべたらむやう也。 (更級日記・竹芝寺)
- (28) 御くだ物・御みきなど、さりぬべく参らせよ。みづからも参るべきを。かへりて、
物さわがしきやうならむ。 (源氏物語・行幸)
- (29) たぐひたまはむも、ことごとしきやうにや侍らん (源氏物語・藤袴)

(24)では「やう」が修飾語句なしで用いられており、(25)(26)では格成分を伴って文の主語や目的語位置に立っている。(27)では「やう」の前接部分が「たてならべたらむ」というモダリティ句になっている。(28)では「やう」の後に更に「む」で統括されるモダリティ句を重ねている。(29)では「～やうにや」という形式で疑問の意味で用いられている。これらは、「やう」自体がモダリティ句ではなく名詞句であるが故の性質であると言える。すなわち、古代語のヤウナリでは「よう」が名詞性を有していたことが分かる。

ここでは山村 (2013) で示された名詞性のテストを「様子だ」においても当てはめて検討を行う。まず、「様子」は何の問題もなく修飾語句なしで用いることができ、文の主語や目的語位置にも立つことができる。(30)(31)のように、「様子だ」に「ような」「そんな」「みたいな」「～げな」といったモダリティ形式が前接する場合もある⁽⁷⁾。また(32)のように、疑問文として用いられている例も4例ではあったが存在した。

- (30) 藤岡さんは、だれかと喧嘩をしたようなようすだった。髪が乱れて、右頬がはれている。 (田中雅美『赤い靴探偵団』)
- (31) みんなって、本当にみんなですか？とさらにしつこく尋ねると、最近では例外もあって…とあまり話したくなさそうな様子。 (俵万智『ひまわりの日々』)
- (32) はい、どげんしたとでっしょ、マーちゃん知っとる様子でしたか？ (佐木隆三『復讐するは我にあり』)

更に、冒頭に挙げた工藤 (2014) でも指摘されているように、「様子だ」は否定形式を持つことができる⁽⁸⁾。これはヨウダと異なる特徴である。

- (33) カツは、扉を背にして銃口を翔に向けていた。しかし翔は、この脅迫じみた声に、
どんな注意も払う様子はない。 (笠井潔『サイキック戦争』)
- (34) 「パクられても、あまり悔しそうな様子じゃなかったな。なぜだ。面白半分にやったのか」 (草野唯雄『電話メモ殺人事件』)

ただし、「様子だ」にモダリティ形式が後接した「様子だろう」「様子らしい」などの例

は確認できなかった。

以上のことから、「様子だ」は現代語のヨウダと比べても明らかに名詞性を有しており、統語構造から見れば古代語におけるヤウナリの振る舞いに近い。山口(2001)、近藤(2007)によると、ヨウダが推定の用法を持ち始めるのが中世前期頃で、近世に入った頃には用法が定着する。意味的に見ると「様子だ」には内実推定の用法があり、中世後期～近世のヤウナリ(ヨウダ)に近い。すなわち、「様子だ」は名詞性を高く保ちながらもヨウダと同様の推定用法にまで意味を拡張させた形式であると言える。これは、言語形式の通時の変化において、意味変化が名詞性の捨象に先行するという方向性と合致している⁽⁹⁾。

5. 「様子だ」の基本的意味

本節では、ヨウダとは異なる「様子だ」の基本的意味について考えたい。まずは、3節において用例が少ないと指摘した原因推定の用例について述べる。原因推定とは、現在の状況を根拠に、それ以前の過去の出来事について推定を行う用法であった。しかし「様子だ」に見られる原因推定の用例を観察すると、現在の事態を描写するという側面も残しているように思われる。

(35) 保呂草たちがやってきたのが、ほぼ七時。しかし、全員の雰囲気からして、パーティーはずっとまえから始まっていた様子だった。

(森博嗣『月は幽咽のデバイス』)

(36) 第一撃は成功だった。敵の〈ヘルダイバー〉編隊は、急降下に入ったばかりの出鼻を叩かれ、四分五裂の状態で、爆撃を断念した様子だ。早くも重い爆弾を投げ捨て、逃走にかかろうとしている機体もある。(川又千秋『小説推理』)

これらは、「パーティーがずっと前から始まっていた」「敵が爆撃を断念した」という過去時の事態についての推定と捉えられるため、原因推定の用例と考えられる。だがそれと同時に、「全員の雰囲気」「爆弾を投げ捨て逃走にかかろうとしている」という現在の状況の描写とも解釈できる。このどちらに重点が置かれているかは定かでなく、岡部(2011a)が言うように現状描写性を有していないとは言えないのではないだろうか。また過去時の事態に対する推定とは言っても、現在から離れた過去とは言いにくく、時間的な先後関係はあるものの、大きく見れば現在起こっている一つの事態の別側面と考えることも不可能ではないだろう。この点で、明らかに別の二つの事態である、「春休みの間に教習所へ通ったようだ」(=(2))とは質的にやや異なると言える。

敷衍すれば、現在「そういう様子」があることの描写とも、そこから別の事態を導いているとも捉えられるのであり、両者の境界が必ずしも分明ではないのである。ヨウダと比較すると、「様子だ」には「実際のところはよく分からないが」という概言の意味が希薄であり、積極的に推論行為に関与しているかどうか疑わしい面もある。それゆ

え、ヨウダはモダリティ形式と言えるが、「様子だ」はそうではないと考えられる。

「様子だ」に強い現状描写性があることの帰結として、江戸語のヨウダと異なり比喻と内的感覚の用法がないことに対して説明が与えられる。まず比喻用法についてだが、「XはYようだ」と模式的に示すと、意味は「XがYに似ている」となる。ここで「似ている」ということは、「 $X \neq Y$ 」であることが前提である。一方「XはY様子だ」の場合、「様子」が視覚的に認識される情報であるため「 $X = Y$ 」になってしまう。つまり、話し手が直接捉えた「様子」の存在を述べるため、「実際はそうではない」という比喻の意味にはならないのだと考えられる。

次に内的感覚用法だが、松本（1998）が指摘するように、話し手と文脈上の主語が一致する場合の用法である。言い換えれば、会話文における一人称主語の場合に限定されることになる。しかしながら、「様子だ」には一人称を主語とする例がごく僅少であり、2例しか確認されなかった。そもそも内的感覚用法で表されるのは「目が回る」「手が痺れて感覚がない」といった話し手の身体内部の感覚であり、これを視覚的に捉えることはできない。従って、内的感覚用法も「様子だ」には存在し得ないと考えられる。

ヨウダと「様子だ」の基本的意味の差異を端的に示すと、ヨウダは「XはYに近い」、「様子だ」は「XはYに見える」となる。なお、岡部（2002）ではヨウダの基本的意味を「話し手の印象では現状(X)が事態(Y)に見えることを表わす」と規定しているが、「様子だ」と比較した場合この規定には不具合が生じる。本稿では字義通りの「視覚」といった意味で「見える」という語を用いており、対照関係を明示するためヨウダの基本的意味を「近い」と規定し直した。つまり、ヨウダでは現状(X)と事態(Y)が近接していればよいと、別の事態を導き出すことも、別の事態に準えることも可能である。これに対して「様子だ」では現状(X)が話し手には事態(Y)に見えることを表すため、話し手が認識した「事態」そのものが存在することは確かである。まとめれば、「様子だ」は現代語のヨウダよりも現状描写性が強く、現状解釈性は弱いということになる⁽¹⁰⁾。

6. 明治期以降のヨウダ・「様子だ」の展開

本節では、ヨウダと「様子だ」の用法間における通時的な変遷について述べる。まずヨウダについてだが、既に見たように、江戸語においては原因推定の用法が見られなかったが、現代語には存在する。ということは歴史的変遷の中でヨウダの原因推定用法が発生したことになるが、そのあり様について詳しくは明らかにされていない。

そこで、明治期以降のヨウダの用例を調査し、原因推定用法のヨウダについて考察する。調査対象は、明治・大正期の雑誌コーパスである「明六雑誌コーパス」「国民之友コーパス」「太陽コーパス」と、新潮文庫「明治の文豪（CD-ROM版）」である。ここからヨウダの用例を収集し、その用法を調査した。結果は次頁の表にまとめられる。

【表4】近代雑誌・小説における用法別ヨウダの用例数（括弧内%）

	内実推定	原因推定	様態	比喻	内的感覚	計
明六雑誌（1874～75）	3	0	0	0	0	3
国民之友（1887～88）	9	0	27	5	1	42
太陽（1895）	26	1	61	12	6	106
太陽（1901）	50	3	115	46	4	218
太陽（1909）	70	14	304	59	9	456
太陽（1917）	63	35	244	49	11	402
太陽（1925）	114	31	386	53	7	591
近代雑誌（計）	335(18.4)	84(4.6)	1137(62.6)	224(12.3)	38(2.1)	1818
近代小説（1888～1920）	392(29.5)	37(2.8)	570(42.9)	295(22.2)	34(2.6)	1328
近代期ヨウダ（計）	727(23.1)	121(3.8)	1707(54.3)	519(16.5)	72(2.3)	3146

原因推定の古い例としては、雑誌『太陽』・小説ともに19世紀末のものがあつた。

- (37) 平壤義州までは漕付けたが満州の寒さにやア到底かなふまい、それに今日の電報に由つて見ると花園口へ上陸した様だが、何億と金を費ひ、有りと有らゆる新式武器を備へ付た旅順口は一ト月や二月で落ちるものではない

（飯田旗軒「日本と欧米」『太陽』1895年5号）

- (38) まあどうなされたので御座んしよな、と問ひかけられて、それは我れより尋ねたき思ひ、平常着のままで御座りましたかと問へば、はあ羽織だけ替えて行かれたやうで御座んす、何か持つて行ましたか、いゑそのやうには覚えませぬと有るに、はてなと腕の組まれて、この遅くまで何処にと覚束なし。

（樋口一葉『われから』1896年）

これらは「花園口へ上陸した」「羽織だけ替えて行かれた」という過去時の事態について推定するものであり、原因推定用法の例であると言える。明治・大正期の原因推定用法の例はヨウダ全例の3.8%であり、現代語よりは低くなっている。とは言え、岡部（2011b）が述べるように、「少なくとも1900年代前半には、ヨウダ、ラシイともに、現代語と同じく〈内実推定〉と〈原因推定〉という〈推定〉表現全体を担うことができるようになって」（p.212）ことが分かる⁽¹¹⁾。従って、ヨウダの原因推定用法は歴史の変遷の中で生じ、その時期は19世紀末から20世紀初頭の明治後期ごろであると推測できる。

同様に、明治・大正期における「様子だ」についても調査を行った。結果は次頁の表にまとめた。

【表 5】近代雑誌・小説における用法別「様子だ」の用例数（括弧内%）

	内実推定	様態	計
国民之友（1887～88）	9	9	18
太陽（1895）	7	10	17
太陽（1901）	18	15	33
太陽（1909）	5	31	36
太陽（1917）	8	9	17
太陽（1925）	9	16	25
近代雑誌（計）	56(38.4)	90(61.6)	146
近代小説（1888～1920）	82(44.8)	101(55.2)	183
近代期「様子だ」（計）	138(41.9)	191(58.1)	329

明治・大正期の「様子だ」にも、現代語と同じく内実推定や比喩の用法は見られない。そして、原因推定用法と解釈できる用例は見られなかった。3節で述べたように、「様子だ」の原因推定用法は現代語においても稀であり、明治・大正期でも事情は同様であったと思われる。

現代語と同様に、様態と内実推定の用法は存在する。

- (39) 見ると彼は左の手で頻りに薪を差し易えながら、右の手に黒い表紙の本を持って、用の合間合間にそれを読んでいる様子であった。（夏目漱石『門』1910年）
- (40) 其の時分に唐詩選を教へて貰ひよつたところが、こいつが極く鈍物で幾遍村夫子が教へてもなか／＼覺えない、どうも村夫子が甚だ怒つて居る様子ぢや
（芳川顥正（談）「青年時代の苦学（上）」『太陽』1901年1号）

(39)では「彼が右手に黒い表紙の本を持って読んでいる様子」を話し手が捉え、それをそのまま描写していると考えられるため、様態の例である。(40)では副詞「どうも」と共起し、「唐詩選を教へてもなかなか覺えない」という現状から「村夫子が甚だ怒っている」という事態を推測しており、内実推定の例である。

また以下のように「伝聞」に近い意を表す例も見られた。

- (41) 目下米國フロリダのインヂアンリバー沿岸、西方パルムピーチ諸地の園藝家等は苦心栽培中の様子である、（市村塘「最も美味なる果実」『太陽』1901年14号）

(41)は現代語であれば「苦心栽培中の模様である」と言ってもよく、伝聞的なニュアンスが感じられる。しかしこれは「そういう様子がある」と述べるだけで、そうだとはい切らないところから生じた効果であると言える。雑誌の評論記事という硬い文体であ

ることも手伝って、そうしたニュアンスを感じ取りやすくなっているものであり、様態用法の亜種として捉えるのがよいと思われる⁽¹²⁾。

7. 〈様態〉から〈推定〉へ

本節では、今まで述べてきたヨウダと「様子だ」における用法の関係について、理論的側面から考察を加える。2節で挙げた岡部（2011a）でも指摘されているように、様態と内実推定は用法として連続したものである。様態とは話し手が把握した状況をそのまま述べるものであり、内実推定とは話し手が把握した状況を別の側面から描写するものであった。この2つは「現在の状況を捉える」という点において共通しており、岡部（2011a）では、両者はともに「現状描写性」を持つと述べられている。

また、内実推定と原因推定も連続した用法であると考えられる。内実推定は話し手が把握した状況の背後にある現在の事態を導き出すものであり、原因推定とは話し手が把握した状況の原因となる過去の事態を導き出すものである。つまり、ある事態から別の事態を引き出すという点で共通しているのである。これは要するに「推論を行う」ということであり、岡部（2011a）では「現状解釈性」と称されている。

ヨウダ（ヤウナリ）の用法の変遷には、以下のような段階が想定できる。まず、話し手の知覚による事態把握であり、これが「様態」である。次に、その背後にある別の事態を導き出すことが可能になる。ここでヨウダによって表されるのは、話し手が直接捉えた事態ではないので、話し手にとって不確実な事態である。ここから「概言」の意味が生じてくるのであり、「推定」の端緒であると言える。更に推定形式としてヨウダの機能語化が進み、過去時の事態にまで判断を行うことが可能になる。ここでヨウダによって表されるのは話し手が現在捉えた事象とは直接的な関連のないものであり、ここに至って「よう」に当初あった〈様子〉の意味はほとんど残っていないことになる。まとめると、ヨウダはもともと「様態」に相当する用法しか持っていなかったが⁽¹³⁾、後に概言的な意味を表す用法、すなわち「内実推定」の用法を担うようになり、更に時代を経て「原因推定」用法まで獲得したのである（岡部2011b）。このような用法の変遷が生じた背景には、先に述べた用法間の近接性がある。

「様態」から「推定」への変化を辿った形式として、小柳（2013）では終止形承接の「なり」が挙げられ音響による事態把握からその原因となる別の事態の推定へと変化したと述べている。また、川瀬（2014,2015）では副詞「どうも」「どうやら」の変遷が論じられている。これは、既に述べたように、現状のある事態を描写すること（様態）とその事態の背後にある事情を見出すこと（推定）が隣り合わせであることに依る。

こうした用法の変遷は、名詞性とも大きく関連する。山村（2013）でも述べられているように、時代を経るごとに「やう」の名詞的性質が徐々に失われていっている。推定用法の発生は中世前期頃とされているが（近藤2007）、モダリティ句との承接関係などの統語的側面から見ると、名詞性は中世後期頃までは残存しており、表す用法が名詞の統語的性質に影響を与えたことが分かる。つまり、「現状描写」的な意味の漂白に伴っ

て、「よう（様）」の名詞性が通減してきたと考えられる。

こうした用法と名詞性との関わりから考えると、「様子だ」の用法分布も理解できる。既に確認したように、現代語において「様子」は実質的な意味を持った名詞であり、ヨウダとは大きく異なる。そのため、様態用法は当然存在する。推定用法も存在しており、様態と推定の連続性が窺える。ただし、やはり名詞性が強いために話し手が直接捉えたのではない事態を、時間軸を遡って推論することはできない。従って、原因推定用法はごく限られた例しか見出せないと考えられる。

ここで強調しておかなければならないのは、現代語の「様子だ」が内実推定用法を有しているのは歴史変化によるものではないということである。この点、ヨウダとは事情が異なっている。名詞が文末位置に立つことによって名詞性を低下させるというのは共時態において起きる現象である。これは青木（2010）で文末名詞文について指摘されていることだが、「様子だ」でも同様であると考えている。

8. おわりに

本稿では、近現代語における「様子だ」という表現形式について、助動詞ヨウダと対照させることでその性格を明らかにした。まず「様子だ」の用法に関しては、「推定」の2用法のうち、現在の事態を推定の対象とする「内実推定」の例は存在するが、過去の事態を推定対象とする「原因推定」の例は非常に稀にしか出現しないことを指摘した。次に統語的側面では、「様子」はヨウダとは異なり通常の名詞としてごく普通に用いられるものであり、古代語のヤウナリに近い性質を見せることを述べた。つまり、話し手が認識した「様子」の存在は確実なものであり、現状描写性を消失することはできず、結果的に現在の事態との関連が見出せる内実推定に用法が留まっていると解釈できる。ここから、「様子だ」は現実存在する「様子」について述べるものであり、モダリティ形式とは言えないことになる。

なお、「様子だ」をヨウダの変遷と対照させるというのは、ヨウダに見られる歴史的变化を「様子だ」に当てはめることを意味するのではない。寧ろ方向性としては正反対であり、現代語の「様子だ」の方から過去のヨウダへと逆照射し、前近代におけるヨウダのあり方を「様子だ」と対置することで捉え直すといった意味である。意味用法と統語的性質の関係など、両形式に共通する側面はあるが、必ずしも全く同一に捉えられるわけではない。時代を隔てた言語形式を比較対照する「史的対照研究」の有効性は夙に指摘されているが、本稿で論じたのもその試みの一つである。「様子だ」の分析に際して、ヨウダの史的変遷を考慮に入れることで明らかにできた部分も大きく、異なる形式に対する史的対照も意義はあったと思われる。

補説 近世までの「様子」の用例と「様子だ」の発生

ここでは、名詞「様子」の歴史的に見た用いられ方と、「様子だ」という表現形式がいつ頃から見られるかについて、ごく簡単に述べる。『大漢和辞典』を参照すると漢籍

を典拠とする用例があり、漢語であると言える。室町期の古本節用集にも記載があり、同時期には漢字熟語として認識され存在していたことが分かる。日本語の用例では、『日本国語大辞典』によると、現代語に繋がる「物事の状態、有様、形勢、状況」といった意味で用いられている例の初出としては、以下の『史記抄』の例が挙げられている。

(42) 其土の様子と其土のできものの様子とかかはるぞ (史記抄・三・夏本紀)

また『日葡辞書』にも「Yōsu. 事件・事柄のありさま、または成行き状況」として立項されており、中世には既に存在していたことが分かる。抄資料には上記の例を始めとして、各種古語辞典に用例が記載されている。『日葡辞書』に立項はされているものの、『天草版平家物語』『エソポのハブラス』には「様子」の例は一例も確認できなかった。

『虎明本狂言』には「様子」の例が計43例見られた。その中には、現在と同じく「物事の状況、有様」といった意味で用いられている例も確認できる。

(43) 某はいつもよりもはらが立たに依て、せつかんせうと思ふてきたれ共、きやううちまいりと云に付て、都の様子がききたひ程に、此度はゆるす、都のやうすをかたつてきかせひ (虎明本狂言・二千石)

だがこの場合、単に見え姿としての「様子」のことを言っているのではなく、動態も含めた「都の状況、動静」のことを指していると考えられる。また、「わけ、事情、子細」といった意味で「様子」が使われている例もある。

(44) 今日むこ入をいたすに付て、こなたへまづまいつて、其やうすを申てから、参らふとぞんじてこれへまいつた (虎明本狂言・引敷聲)

これは、「本日聲入りをするという事情、そういう次第」を述べるといった用例であり、現代語の「様子」とは語義が異なる。『虎明本狂言』における「様子」は「見る」「聞く」「云う」「語る」といった特定の語句と共に用いられることが多く、固定的な用法とも言える。中世における「様子」の意味変遷について論じた劉(2003)では、「ヤウス(様子)」の意味は「見本・雛形」から「具体的なコト」・「形」・「状況・ワケ」などの意味に広がったと考えられる(p.122)と述べられている。これは、中世の「様子」は広く「事柄」全般を指しており、現代よりも担う意味領域が広がったと解釈することができる。

なお、コンピュータを伴って用いられている例は、以下の1例のみであった。

(45) 又あれへまいれば、こなたへもまいらいでならず、一日\／ととめられて、たま

たま宿へもどれば、あのごとくにいたすに依て、宿へかへるひまの有時も、ゑも
どらぬやうすで御ざる程に (虎明本狂言・腹不切)

ただしこの例も「戻れないわけなので」といった意味を表すものであり、現代の「様子」とは異なる。従って、本稿で扱った「様子だ」に連なる例とは見なせない。

続いて、近世における「様子」の使用について見る。近世においても用いられ方に大きな変化は見られず、「状態、有様」といった意味や「わけ、事情」といった意味で用いられる例があり、浄瑠璃や歌舞伎、浮世草子や洒落本・滑稽本・人情本など幅広い文芸作品に用例を見出すことができる。コンピュータを伴った用例も幾らか見られる。

- (46) 内外の者に目くばせしそろ／脇へ退く様子。 (重井簡・p.82)
- (47) そちは今のを無念がる様子じやが、たとへ昔は公家の落し子にもせよ、今末社で口を過ぎやうと思ふからは、そふした事では間があはず。 (傾城禁短気・p.368)
- (48) 千次「コレサ／＼お辰どん、くわんぺら様は、何だか強ふお腹を立てゐる様子だ、めつたな事を云て叱られるな」 (助六・p.64)
- (49) きた八うつゝをぬかして、うちふしけるが、夜もしだいにふけゆくまゝに、犬のとをばゑものさみしく、時のたいこも、はや、うしのこくばかりなるに、吉弥目さめしやうすにて「モシナ／＼よふねてじやな」 (東海道中膝栗毛・p.363)
- (50) 仇吉は元の座に行、おとなしく小聲にて 仇「米八さん、ちよつとはさかりながら上ませう」よね八はきこえぬやうすなり (春色辰巳園・p.248)

これらの用例は現代語として見てもさほど違和感のないものであり、「内実推定」と思しき用例も存在する。このことから、「様子だ」の内実推定用法の獲得が、歴史的変化によるものではなく共時的現象であることが分かる。本稿で扱った「様子だ」へと連なる用例だと考えることができる⁽¹⁴⁾。

以上、名詞「様子」の用例は中世まで遡ることができるが、コンピュータを伴い「様子だ」という形で用いられる例は、概ね近世以降に見られるようになったと考えられる。本稿は「様子だ」の史的変遷を扱うものではないため、近世以前の「様子だ」についてこれ以上立ち入って論じることはしない。「様子だ」について言及する際、本稿では明治以降の例を使用した⁽¹⁵⁾が、近世まで遡ってみても「様子だ」自体の性格に何らかの変化が起こったとは考えられず、近現代語の用例を対象としても一応の結果は得られたと思われる。

【注】

- (1) 工藤(2014)の言う〈知覚印象〉とは、後述する「様態」に相当する用法である。
- (2) 「内的感覚」の用法が「江戸語特有の用法」というのは現代語と対照させた場合に言えることであり、後で述べるように、明治・大正期においても用例は多少存在する。またこの「内的感覚」用法といわ

ゆる「婉曲」用法もかなり近接しており、これらの位置づけも問題となるが本稿ではこれ以上立ち入らないこととする。

- (3) 検索条件は、「活用形：連体形」―「語彙素：様子」―「語彙素：だ／です／。」である。
- (4) 「様子だ」と「どうやら」が共起する例が26例、「どうも」と共起する例が10例見られた。
- (5) 判断に迷った場合でも、便宜上「様態」「内実推定」のいずれかに分類している。本稿の議論では、現代語の「様子だ」において原因推定の例が少ないということがポイントであり、(17)(18)で挙げたような判断に迷う例をどちらに分類するかということは主たる問題としていないので、このような処理でも本稿の議論に重大な支障は生じないと判断した。
- (6) ヤウナリの用法について、近藤（2006,2007）によると、『源氏物語』には現代語のヨウダに見られるような概言の用法は見られないが、『今昔物語集』には用例が確認されている。
- (7) 「様子だ」に「ような」が前接する例が26例、「そんな」が17例、「～げな」が5例、「みたいな」が1例、「らしい」が1例であった。
- (8) 「様子だ」の否定形には、「様子はない」と「様子ではない」の2種類がある（新屋1989）。
- (9) 具体的には、ダケ、バカリなどのとりたて詞の類がこれに当たると考えられる。
- (10) ここでの「描写」は、「視覚的に捉える」のような比較的狭い意味で用いている。
- (11) ラシイも、ヨウダと同じく江戸語において内実推定を表すことはできたが、原因推定を表す用法は存在しなかった（岡部2011b）。
- (12) 「様子だ」がこのような意味合いで用いられていたのは、同時期に『太陽』において「模様だ」という形式がまだ確立していなかったことと関連する可能性がある。詳しくは別稿を期したい。
- (13) ただし、中古のヤウナリには様態に加えて比喩を表す用法もあった（近藤2006）。ここでは比喩用法については問題としない。
- (14) ただし狂言に見られた「事情、わけ」といった意味を表す例も存在しており、「模様」の語義自体が現代語と同様になったわけではない。この用法は、「様子ありげ」という形で明治ごろまで残っている。

【用例出典】

辞書類：土井忠生・森田武・長南実(編訳)『邦訳日葡辞書』岩波書店／『日本国語大辞典（第二版）』小学館
中世：大塚光信・来田隆(編)『エソポのハブラス：本文と総索引』清文堂出版／江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院／大塚光信(編)『大蔵虎明能狂言集：翻刻註解』清文堂出版
近世：岩波書店『日本古典文学大系』
近代～現代：国立国語研究所「日本語歴史コーパス」「明六雑誌コーパス」「国民之友コーパス」「太陽コーパス」「現代日本語書き言葉均衡コーパス」／新潮社「CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪」

【参考文献】

- 青木博史（2010）「名詞の機能語化―形式名詞を中心に―」『日本語学』29-11
青木博史（2011）「述部における名詞節の構造と変化」青木博史(編)『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
岡部嘉幸（2002）「江戸語におけるソウダとヨウダー推定表現の場合を中心に―」『国語と国文学』79-10
岡部嘉幸（2011a）「現代語からみた江戸語・江戸語からみた現代語―ヨウダの対照を中心に―」金澤裕之・矢島正浩(編)『近世語研究のパースペクティブ』笠間書院
岡部嘉幸（2011b）「江戸語の推定表現」青木博史(編)『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
川瀬卓（2014）「近世における副詞「どうも」の展開」青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究2』ひつじ書房
川瀬卓（2015）「副詞「どうやら」の歴史的変化」『日本語学会2015年度春季大会予稿集』
工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
小柳智一（2013）「文法的意味の源泉と変化」『日本語学』32-12
近藤要司（2006）「『源氏物語』のヤウナリとヤウアリについて」『親和國文』41
近藤要司（2007）「『今昔物語集』のヤウナリとヤウアリ」『親和國文』42

新屋映子（1989）「“文末名詞”について」『国語学』159

角田太作（1996）「体言締め文」鈴木泰・角田太作（編）『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文
集』ひつじ書房

松本守（1998）「江戸語のソウダとヨウダについて」『専修国文』63

山口堯二（2001）「「やうなり>やうだ」の通時的変化」『京都語文』8

山村祐樹（2013）「形式名詞「よう（だ）」の歴史的変遷—統語構造の観点から—」『京都教育大学国文学会
誌』39

劉相溶（2003）「「ヤウス（様子）」の意味変遷—中世口語文献を中心として—」『専修国文』73

付記 本稿は、日本語学会2016年度春季大会（於：学習院大学）における口頭発表に加筆・修正を施したものである。論文化に際してデータの見直しを行っているため、用例数が変動している箇所がある。ご了承ください。発表に対して貴重なご教示を賜った方々に感謝申し上げます。

（かわしま たくま 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学研究科）